

紙と造形 「マペット」

紙は身近にあり、廉価でさまざまな形で私たちの生活を豊かにしてくれています。あまりにも身近なために、その有用性や重要性に気付かないでいます。「素材との出会い展～紙と造形」では、紙を“見る”“触る”“感じる”“破る”“切る”など、さまざまな体験から、紙の造形活動へと誘いました。その一つが「マペット」です。洋紙の組成をこわしてみる＝何度ももんで繊維をこわす体験から、造形活動につなげるものです。



〈紙〉が布のような風合いに

〈紙〉は、発明されたときから記録や情報を伝えるための素材として、大切に扱われてきました。それは現在でも変わりありません。よく見ると、〈紙〉もいろいろな顔をもっています。機械で漉かれた紙は、繊維が短いため硬い感じがします。一方、手漉きの和紙は、柔らかさやあたたかさを感じます。

造形の素材として〈紙〉を見直すと、別の側面が浮かび上がってきます。例えば、ラシャ紙などの洋紙を破れないように、少し時間をかけてゆっくりもむと、紙の繊維が硬

さを失います。たくさんのしわがよって、表面で光が乱反射し、和紙や布のように穏やかな風合いになります。

「マペット」は、A4判くらいの大きさのラシャ紙をよくもんで、柔らかくして作ります。端から丸めたり、ねじったり、ボールのように丸くして押しつぶしたり、もみ方はさまざまです。もみ方、もむ回数などによって、〈紙〉の趣は異なります。もんだ後に広げたときの紙の感触は、布以上の柔らかさと優しさがあります。

このプログラムは、〈紙〉の質感の変化を手のひらで感じながら、柔らかい表情へと変化した〈紙〉を、子どもの造形に生かすかところに視点を置いたものです。

新聞紙、雑誌、包装紙など身の回りにある紙のほとんどは、木材パルプで作られた洋紙です。日本で洋紙が使われ始めたのは明治初頭です。それまでは中国で発明され、7世紀ごろに日本に伝わり発達した、植物繊維を漉いて作られる和紙でした。

「マペット」では、洋紙のラシャ紙を使います。日ごろは、「紙を大事にしてください」と言われているのに、「くしゃくしゃにしてみよう」と急に言われてもなかなか手

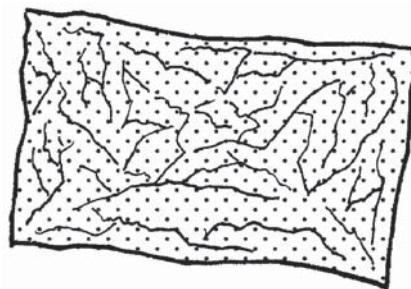
が動かないものです。しかし、一度くしゃくしゃと音を立てて紙をもみ始めると、その手のひらの感覚と、少しずつ柔らかくなっていく紙の変化に驚きます。丸めた紙を恐る恐る広げていくと、たくさんのしわがよっています。何度ももみ紙を繰り返すと、最初のピンとした洋紙は、やさしく柔らかな和紙か布のように変身します。一度〈もみ紙〉という技法を体験すれば、さまざまなプログラムに応用できます。

□作り方□

①ラシャ紙をよくもんで、広げます。



イラスト：横須賀ヨシユキ



②“もむ”と“広げる”を何回も繰り返して紙全体にしわをつけて、柔らかくします。布のような、手ざわりの〈紙〉になります。

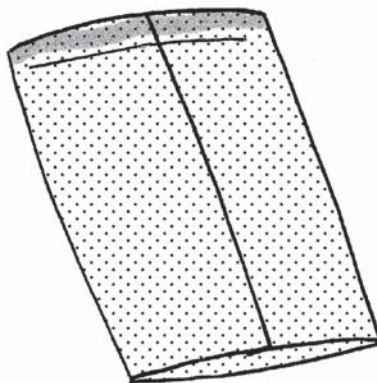
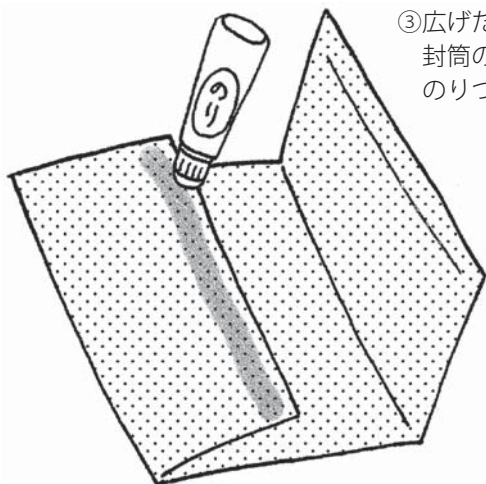
□「マペット」作りで使う道具□

- ①はさみ
- ②のり
- ③水性マーカー

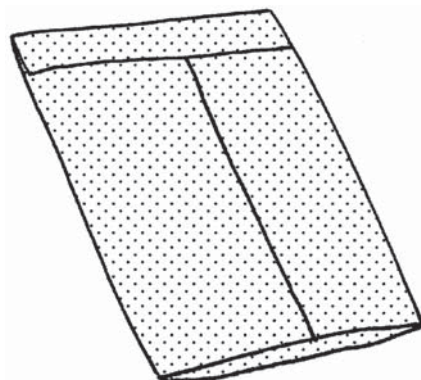
□「マペット」の材料□

- ①ラシャ紙 (B5判～A4判くらい)
- ②飾り用のいろいろな紙

③広げたラシャ紙を封筒の形になるように折り曲げてのりづけします。

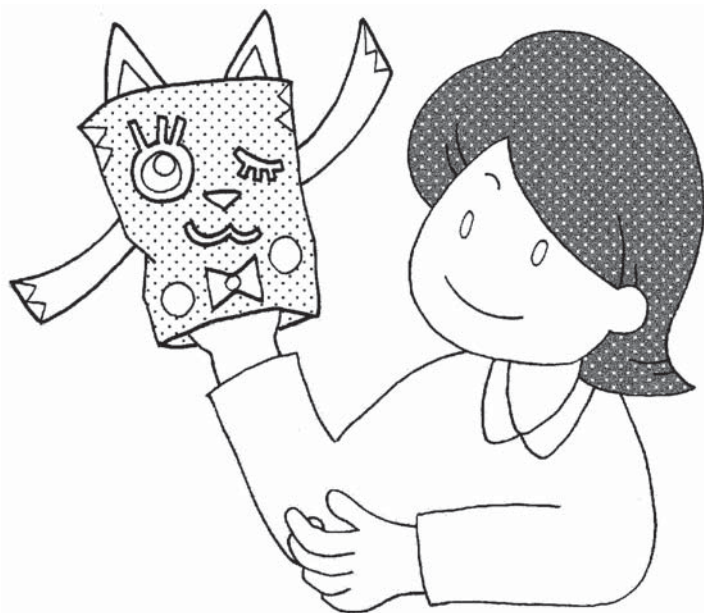


④開いている片方の口を折り曲げのりをつけて、とめます。



⑤封筒の形にします。

⑦手を入れて、動かして遊びます。



⑥いろいろな色の紙や水性マーカーで飾り付けをして完成。



※ラシャ紙のもみ方には、決まりや法則はありません。いろいろな方法で、〈紙〉をもむ感触や手触りの変化を楽しみながら、紙が破れないように柔らかくなるまでもんでみるとよいでしょう。
 ※「マペット」だけでなく、大きな紙を使って、帽子や衣服など身につけるものや、そのほかの造形物の材料として使ってみるとよいでしょう。